

# 11 年 制 中 学 校

横山 悦生

今回の視察旅行では、第12番中学校と第3番中学校の二校を訪問した。

第12番中学校（3月28日に訪問）は、ハバロフスク市立の学校で、今年の9月で創立30周年を迎えるとのことであった。この学校の校長は同校で26年間も在職しており、「ベテラン」教師であるといわれた。同校の生徒数は1200名で、教員は48名（うち男性は5名のみ）で、二部制（午前部は8時30分から12時20分まで）をとっているという。カリキュラムについては、基本的にはロシア共和国の教育省でつくられたカリキュラムにもとづきながら、ハバロフスク地方のカリキュラムによって運営されているとのことであった。この学校では、第1学年から外国語として、英語、ドイツ語、フランス語を選択で学習させていた。日本の文化を早くから知りたいという親の要望が最近強く出されており、この学校でも今年の9月から日本語も実施する予定であるとのことであった。私たちが見学したLL教室（ラウンドテーブル）では、11学年の生徒が英語で流暢に語ってくれたのがとても印象的であった。また、上級学年になると、数学と物理がとくに強化されているという。このことから、毎年80名の卒業生（11学年の？）のうち、医科大学へ10名、技術大学へ10～15名が進学するようである。その他に15～20名は教育大学や教育中等専門学校（ПЕДАГОГИЧЕСКОЕ УЧИЛИЩЕ）へ進学す

るそうである。生徒の親の職業は公務員（国家・地方）が多いようなので、このことが生徒の進路にも影響を与えているのかも知れない。

この第12番中学校では、「メタジスト」という教師についての説明を受けた。メタジストとは「教授法をよくわきまえていて、ものわからない子どもたちに対して言葉だけで説明するのではなく、よくかんで説明できる」教師で、「教師の鏡」であり、5年に1回メタジストになるための国家試験に合格したものがメタジストになれるそうである。校長室には3名のメタジストの写真とその教師の業績が掲示されてあった。

私たちは、労働科の授業を中心に見学させていただいた。同校には労働科の教師は女性が2名、男性が1名いた。この学校では、労働科は1学年から4学年までは週2時間、5学年から9学年までは週4時間、10学年から11学年までは週6時間実施しているようである。私たちは最初に2学年の労働の一部を見学した。このクラスを担当しているアクサーナさん（女性）によると「子どもたちの創造性を育てるために初歩的な労働技能を身につけさせる」ことが目的におかれている。この労働科の教室（入口には「手の労働の部屋」とかかれていた）のうしろには、子どもたちがつくった作品が陳列され、その上の方の壁には「芸術（ИСКУСТВО）労働（ТРУД）



写真の中央はアクサーナさん

科学（НАУКА）」という言葉が人間の手（両手）とともに描かれてあった（写真参照）。

このクラスの授業は26名であり、男女共学であった。この授業では、布細工、粘土細工、紙細工などをおこなう。作品としては、おもちゃをつくったりしているが、なかには幼稚園からの注文をうけて積木をつくることもあるとのことであった。

次にサービス労働（обслуживающий труд）の特別教室を見学した。そこには生徒はいなくて、2人のサービス労働を担当している教師だけが紹介された。一人は5学年から7学年を担当しているアンナ・ニコラエブナさん（女性）で、もう一人は8学年を担当しているフェデレンコさん（女性）であった。サービス労働の授業では、5年制はまず布について学習し、エプロンを作り、さらにさまざまな小物スカートや服などをつくる。それにいろいろな模様をつける。また、マクラメという壁掛けや伝統的な民芸品などをつくり、これに刺繍したりする。このようにしてつくったものは、市民たちの発注によってつくったもので、販売に出すとのことであった。この販売によって得たお金はこの（特別）教室で有効に使うといていた。この教室では足踏みミシンや手動ミシンが使用されていたことも驚いたことの1つであった。このサービス労働の授業をうけている生徒の36%は男子生徒だといっていたが、こちらの質問が正しく

伝わったかどうかは疑問であるので、この数字は確かなものでないかもしれない。

次に職業指導の教室を訪問した。ここには、11学年の女子生徒しかいなかった（このクラスには1名の男子生徒がいるそうだが、その日は他のところへいっていたらしい）。11学年の他の男子生徒はどこにいるのかを尋ねたところ、教育生産コンビナートや他の工場にいているとのことであった。

最後に私たちは、この学校の子どもたちのアンサンブル「ラードスチ」（喜び）の民族舞踊をみせていただいて、この第12番中学校をあとにした。

第3番中学校（3月30日に訪問）はハバロフスクの中でももっとも古い学校の1つで、30年前までは朝鮮人のための学校であったようである。生徒数は1200名で、教員数は70名。この学校には、少数民族の（ナナイ人、ウルチ人、エスキモーなど）クラスが2クラスと聾の生徒のクラスが2クラスあり、私たちは聾クラスを見学させていただいた。このクラスは6人の生徒から構成され、国語と数学だけがこのクラスで学習され、他の教科は普通児と同じクラスで授業をうけるとのことであった（なお、この聾クラスが始められたのは、昨年8月の政変以降であったと説明された）。また、この学校では2年前から日本語教育を1学年から導入し、この日本語教育に「ことのほか大きな望みをもっている」と校長は述べていた。この背景には、極東地方の人々の間には日本語学習への関心が高く、この学校でも、正規の日本語の授業以外に、教師のためのクラスや上級学年のためのクラスや父母のためのクラスが開設されているとのことであった。

私たちはここでも労働科の授業を中心に見学させていただいた。最初は5年生の労働科の授業を見学させていただいたが、金属加工の授業であった。この金属加工を担当している先生は男性で、夜間の総合大学を出ており、

以前は主任のエンジニアをされていて、その後、労働科の教師になったとのことであった。この授業の様子（写真参照）や製作品（写真参照）をみていると、日本の工作教育よりはるかに充実しているように思われた。なお、この授業には女子生徒の姿はみられなかった。

次に木工教室を見学させていただいた。ここには、20台の工作台と西洋鋸などの木工具（写真参照）や学習用の木工旋盤（写真参照）などが置かれてあった。

さらに、5年生の組紐の授業を見学させていただいた。ここには女子生徒しかいなかった。男女別学で労働科の授業がなされているように思われたので、それについて質問したところ、校長からは1学年から4学年は男女

共学でやっており、5学年から8学年までは「教育省が定めたプログラムにそってやっている。裁縫や組紐などの手芸工作は女子のためにつくられたプログラムで、木工や金工は男子のためにつくられたプログラムである」と説明された。また、9学年から11学年はさまざまな職業を選択するようになり、男女別ではないとのことであった。

5学年から7学年については、男子は金工や木工、女子は手芸工作ということに校長をはじめ教師たちも生徒たちも何の疑問ももっていないのがハバロフスクの現状のように思われた。

（岐阜大学）

